

早稲田大学高等学院研究年誌第61号 抜刷
2 0 1 7 年 3 月 発行

ヴェリニユス・カウナス訪問記

小 林 岳

ヴィリニウス・カウナス訪問記

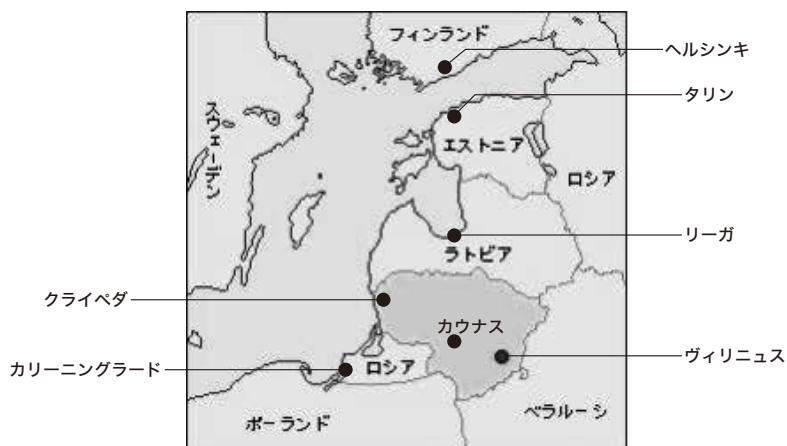
小林 岳

はじめに

私は、2016年9月1日より7日までリトアニア共和国のヴィリニウス市ならびにカウナス市に研究出張した。その目的はドイツ＝ナチ政権のユダヤ人迫害政策と杉原千畝の功績に関する現地調査および資料収集である。

小稿は、その調査行における見聞記であるとともに高等学院の世界史講義資料としてまとめたものである。なお、ここに記す博物館とその展示の概要およびさまざまな解説は現地で収集した資料ならびに各館ホームページの記事に依拠することをお断りしておく。

リトアニア共和国の概要と歴史



①リトアニア共和国地図 (1)

(42)

駐日リトアニア共和国大使館のホームページによると、その国土は6万5300平方キロで、東北地方（青森、秋田、岩手、宮城、山形、福島の6県）の総面積6万6889平方キロにほぼ等しい。また総人口は297万9000人で、首都ヴィリニユスの人口は53万8700人、カウナスのそれは30万7500人とあり、また民族構成はリトアニア人84.2%、ポーランド人6.6%、ロシア人5.8%、ベラルーシ人1.2%、その他2.2%と記されている。

1992年に制定されたリトアニア共和国憲法は「思想、宗教及び良心の自由は制限されない」と記され、⁽²⁾ 同国ではローマ＝カトリック、東方正教会、ルター派、カルヴァン派、⁽³⁾ ユダヤ教、イスラム教などさまざまな宗教が信仰されている。ここでは国民の大多数を占めるリトアニア系国民がローマ＝カトリック教徒であること、また後述するように、それら宗教の力がソ連から強制された社会主義政策を否定し、独立をとげる原動力となったことに注意したい。

後掲のリトアニア略史に見るごとく、この国は15世紀前半にヨーロッパ有数の大国に成長したのちしだいに勢力を減衰させ、18世紀末にはロシアの属国に組み込まれた。

第一次世界大戦後ようやく独立するものの、20年に満たずして独ソ不可侵条約の秘密議定書によってソ連軍の支配下に入り、ついで独ソ戦がはじまるとドイツ軍の占領下、さらにその敗走後はソ連軍に再占領されるのである。その間にドイツに協力する者、ソ連に協力する者が交互に現れて占領軍の命令のもとユダヤ系であれ、リトアニア系であれ敵とされた同朋を捕らえ、強制収容所への送付に協力したのである。このように古来よりリトアニアは大国の狭間に在るがゆえの苦難がくり返され、とくに1930年代から40年代のそれは筆舌に尽くしがたい状況を呈するのである。以下小稿もその概略にふれるが、ここで敢えて一言するならば、世界の歴史には、そのような事例が無数に存在することもまた事実である。

さて、リトアニア共和国が再独立をはたす契機となったのはソ連の弱体化にあることは異論のないところであろう。1985年、ソ連共産党書記長となったゴルバチョフが政治、経済の立て直しを目指したペレストロイカとグラスノスチ

(情報公開)に揺れる政治的混乱を好機としたリトアニアの独立運動は、ラトヴィア・エストニアに派生して独ソ不可侵条約の調印50年目にあたる1989年8月23日に、ヴィリニユスからラトヴィアの首都リーガを経てエストニアの首都タリンまでつづく600kmの道路上に200万とされる人々が手に手を取って「人間の鎖」をつくり、ソ連邦からの離脱を訴えるバルト三国の独立運動に発展するのである。これが1991年の独立に直結することは言うまでもない。リトアニアが先導した独立運動が二国に連動してソ連から独立を果たす、その背景にはほぼ同軸上に展開した三国の歴史があることもまた事実であろう。

リトアニア略史

1253年 リトアニア大公国の成立

1386年 リトアニア・ポーランド同君連合の成立

ヴィタウタス＝マグヌス大公（位1401～1430）の治世下でヨーロッパ有数の大国となる

1569年 ポーランド・リトアニア連合王国の成立によりポーランドのリトアニアの支配強化

1795年 露普墺の第3次ポーランド分割によってロシア領化

→ ロシア正教の導入、リトアニア文字の禁止とキリル文字の強制

1918年2月 ロシア革命を契機に独立宣言

1920年 ソ連の独立承認 ポーランドのヴィリニユス併合によりカウナスに臨時首都を置く

1922年 日本のリトアニア共和国承認

1939年8月23日 独ソ不可侵条約（モロトフ・リッベントロップ協定）締結

9月1日 ドイツのポーランド侵攻により第二次世界大戦勃発

10月 リトアニア・ソ連相互援助協定締結 → ヴィリニユス返還

11月23日 カウナスに日本領事館開設（領事代理杉原千畝）

1940年6月 ソ連軍のリトアニア侵攻

8月3日 ソ連のリトアニア併合 → ソ連を構成する共和国となる

(44)

- 8月28日 日本領事館閉鎖
- 1941年6月22日 独ソ戦開始 → ドイツ軍のリトアニア占領
- 1944年9～10月 ソ連軍のリトアニア再占領 → 対ソ抵抗運動のはじまり
- 1985年3月 ゴルバチョフソ連共産党書記長就任
- 1986年4月 チェルノブイリ原子力発電所事故
- 1989年8月23日 バルト三国の独立を求める「人間の鎖」完成
- 1990年3月11日 リトアニア独立宣言
- 1991年8月22日 ソ連保守派のクーデター失敗
 - 9月6日 ソ連国家評議会のバルト三国独立承認
 - 12月 ソ連の消滅

ヴィリニユスの概要

現行の『リトアニア共和国憲法』に「リトアニア国家の首都は、リトアニア悠久の歴史的首都であるヴィルニユスである」(第17条)とある。この地は、第一次世界大戦終結直後の1911年11月に共和国独立宣言とともに首都とされるべきであったが、さまざまな混乱およびポーランド軍の侵攻によってヴィリニユスをふくむ東部地域が奪われたため、第二次世界大戦の終結までカウナスに仮首都が置かれた。

ヴィリニユスは東欧、北欧でも有数の美しい街とされ、14世紀に作られた聖母のイコンを取める夜明けの門(16世紀に建てられた5城門の一つで唯一現存するもの)をはじめとする旧市街は1994年にユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されている。

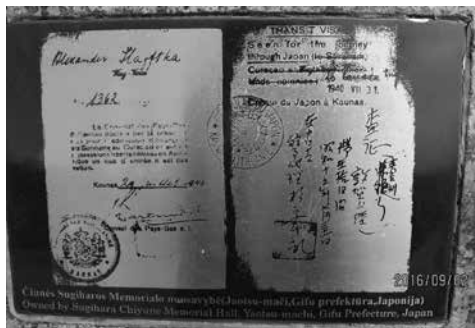
以下、見学・調査した箇所について略述すると、

(1) 杉原千畝記念碑と桜の丘



②杉原千畝記念碑

(以下、写真は⑫⑭⑮を除き小林撮影)



③記念碑の杉原ビザコピー

2001年10月、ネリス河畔に建立された記念碑の左半は杉原千畝の肖像プレート。右半の3枚のプレートの上段は日本語と英語、下段はリトアニア語による杉原の紹介文。中段は杉原が発給した査証（Visa）のコピーである。

その日本語銘文を引用すると下記のごとくなる。

故杉原千畝氏は1900年に日本に生まれ、早稲田大学在学中の1919年に日本国外務省の留学試験に合格してハルビンに学び、その後外交官となった。1940年駐リトアニア共和国領事代理の時代に、身に迫る戦争の危機の中にありながら、必死の覚悟と信念を以て、亡命ユダヤ人約六千名に対して一か月にわたって査証を発給し続け、彼らの生命を救った。これは戦争時における輝かしい人道的行為として歴史に記憶され、永く語り継がれるべきものである。

ここに早稲田大学は、校友として世界に誇るべき氏の功績を称えて記念碑を建立するとともに、リトアニア共和国との学術交流による友好関係がさらに深まり花開くことを祈念して桜の木を植樹するものである。

2001年10月2日

早稲田大学

なお、この桜にちなむオペラ「杉原千畝物語—人道の桜—」が創作され、2015年5月にヴィリニユスの国立ドラマ劇場で初演ののち、同7月に早稲田大学大隈記念講堂および同12月に品川きゅりあんホールで公演された。

(46)



④記念碑前から桜の丘を見る

(2) 虐殺犠牲者博物館 (旧KGB博物館)

かつてソ連のKGB (ソ連国家保安委員会) 本部が置かれた重厚長大なビルの一部を博物館として公開するものである。以下、見学順に1階、2階、半地下1階について記すが、各階ともテーマ別に写真、地図、武器、軍服、機材、書類などが展示されている。

博物館受付がある1階の第1室は1940～41年のソ連併合時代のリトアニアに関する展示。第2・3室は1944～53年にかけて自由と独立を求めて森林に隠れ、ソ連に対してパルチザン闘争を継続した「森の兄弟」に関する展示。1944年7月のドイツ軍敗退はソ連軍による再占領にほかならず、それに抵抗するリトアニア国民の9年間の戦闘の状況および戦死者、協力者として処刑された市民など二万を越える人々を讃える内容である。第4室は同時期における反ソレジスタンス運動とソ連政府の弾圧に関する展示である。なお会議室では特別展示 (2016年9月4～14日) が行われており、その説明パネルによると、独ソ戦直前の1941年6月14～18日に行われた知識人階級を主とする18000人 (子供5000人を含み、家族全員という例も多数) のシベリア追放に関する展示で、彼らはシベリア中央部のクラスノヤルスク、コミ、カラガンダ、トムスクおよび北辺のラプテフ海沿岸などに点在する強制労働収容所や一般収容所に分散収容され、その劣悪な環境のもとで斃れる者が続出し、追放後15年を経た1956年、生き残った1157人だけが母国リトアニアにもどれたと記されている。

なお、さらに1989～1991年にかけての追放者および子どもがシベリア各地の収容所跡地を訪れ、凍土から親族の遺骨を収集して母国リトアニアに持ち帰ったとの追記がある。



⑤収容所墓地に建てられた
慰霊塔ミニチュア

2階第5室は、1944～56年にリトアニア国民が収容された監獄と強制労働収容所に関する展示。第6・7室は、1944～56年にソ連政府によって行われた強制移動、シベリア追放に関する展示。第8室は、1954～91年における民衆の反ソ連レジスタンス運動に関する展示。

第9室は、1954～1991年におけるリトアニアKGBに関する展示。第10室は盗聴室を展示するもので、KGB時代の機材が置かれている。

半地下1階各室は、KGB時代の監獄と事務所である。いくつか紹介すると、第08室は防音取調室で内側を30センチほどの綿パッドを張った扉の向こうは二畳ほどの空間で壁面と天井ともに防音パッドで覆われている。これは拷問をとまなう取調中に発する音や囚人の絶叫を遮断するため、中央の人型ハンガーに掛けられた黒い拘束衣が不気味である。第09室は水を張る独房で使用する場合は二畳ほどの床に氷水を張る。囚人は中央の直径20センチ余の円盤状プラットホームに立たねばならず、バランスを崩せば水に落ちる。これは1945～50年代まで使用され、廃止された。現在のものは1996年の開館時に再現したものである。

館外の中庭は旧KGBビルの中央部にあたり、そこには四方を壁で仕切った無蓋の個室運動室が5室ならぶ。ここで囚人は1日に10～15分ほど歩くことが許された。この屋外運動施設の前を通過して別棟の処刑場に入る。ここでは1944～60年代初にかけて千人を超える死刑が執行されたが、その三分之一は反ソ抵抗運動に対してソヴィエト裁判所が下した判決による。処刑場の壁には

(48)



⑥4人用の監獄

弾痕が残り、透明なアクリル製床板の下には死刑囚のものと覚しき眼鏡、指輪、革靴などが散乱する形で展示され、またガラス製展示ケースにはさまざまな写真や資料・図解などが並べられている。

以上、この博物館のコンセプトはリトアニアの独立が侵害されて行政、経済、教育、文化など諸制度が一変させられたソ連の併合期、ドイツ軍の侵攻と占領期、ソ連軍の再占領期およびソ連邦共和国時代に分けて紹介し、占領軍の非道を糾弾するとともに民政移行後につづくソ

連の強権政治とそれに対する国民の抵抗運動の詳細を展示しようとする方針が貫かれることに注意したい。それは(56)頁に記すカウナス市第9要塞博物館も同様である。

最後に、博物館発行のガイド書が記すリトアニア国民の犠牲者を示すと以下のごとくなる。

(1) ソ連占領期

①1940年6月15日～1941年6月22日

- ・逮捕、投獄、殺害 11,000人
- ・シベリア追放 18,000人
- ・1941年6月混乱時の虐殺 700人

②1944年～1953年

- ・逮捕、尋問、投獄 186,000人
- ・シベリア追放 118,000人
- ・武装闘争戦死者、協力者の虐殺 20,500人

③1954年～1986年

- ・逮捕、投獄 1,000人

上記①～③の逮捕者のうち20,000～25,000人が獄死し、シベリア追放中に

28,000人が死亡した。

(2) 1991年ソ連からの独立時

- ・殺害 23人
- ・負傷、その他の受傷 900人

(3) ナチスドイツ占領期 (1941年6月22日～1944年7月)

- ・逮捕、強制収容所移送 29,500人
- ・虐殺 (ユダヤ人約200,000をふくむ) 240,000人
- ・ドイツ移送後強制労働 60,000人

(3) 国立ユダヤ博物館 (ホロコースト展示館)

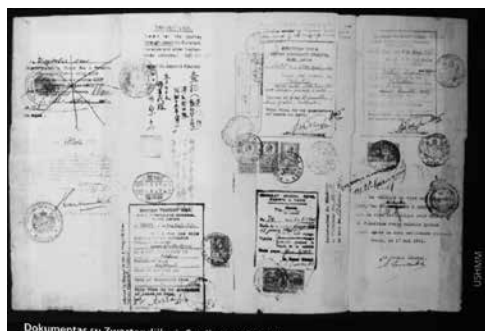


⑦前庭よりユダヤ博物館を望む

前述のごとく、ドイツ占領期のリトアニアで虐殺されたユダヤ人は20万人とされる。中世以来リトアニアには多くのユダヤ人が居住し、都市部を中心に金融や商業などに従事し、裕福なユダヤ人社会を形成していた。なかでもヴィリニウスは「北のイェルサレム」と呼ばれるほどユダヤ文化の中心となっていた。そのヨーロッパ有数のユダヤ＝コミュニティーはドイツ占領期の3年間で構成人口の約96パーセントを喪失したことによって壊滅したが、そこにはドイツ軍に協力したリトアニア人による虐殺も多数あったことを指摘しなければならない。ただし、外壁が緑色に塗られることから通称グリーンハウスと呼ばれるこの博物館には、管見のかぎり、それを強調する展示はないようである。

(50)

各展示室はヴィリニクスゲッターの図解、ユダヤ人家族の写真や遺品、資料、地図、杉原千畝などユダヤ人を救った各国外交官の顕彰などが展示されている。

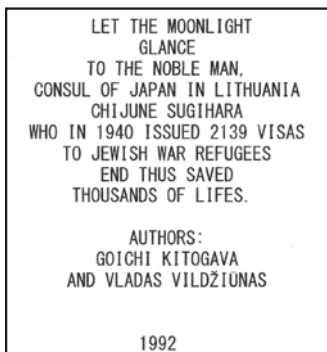


⑧杉原とツバルテンディクのビザを示すパネル

博物館の前庭に立つ杉原千畝記念モニュメントは、1992年、ランズベルギスリトアニア共和国最高会議長の依頼によって彫刻家北川剛一（キタガワ ゴウイチ）氏とリトアニア人彫刻家ヴィラダス＝ヴィルニャス氏（1932～2013）が共同制作したものである。その説明は以下のごとくであるが、冒頭の「LET THE MOONLIGHT GLANCE」をどう訳すか。杉原の仕事を知らねば難しいであろう。この像に直面すると、大きな責任に押しつぶされそうになりながら、人のために命を懸けて踏ん張っている男の姿が浮かんでくる。なお千畝を表記する「CHIJUNE」、北川の「KITOGAVA」はリトアニア語の音声に合わせたものである。



⑨杉原千畝記念モニュメント



カウナスの概要

リトアニア第二の都市カウナスは、現ベラルーシ共和国の南部に水源を発して西流するネムナス川と同北部に水源を発してヴィリニュスを通って西流するネリス川の合流点に位置し、14世紀ごろからロシア諸国の毛皮や木材またリトアニア特産の琥珀などをバルト海方面に輸送する重要な河川港を擁して発展し、15世紀半ばにはハンザ同盟市となって北欧商業圏の一角を担って繁栄した。現在の旧市街に見られる美しい建造物はその賜物である。

(1) カウナス駅

カウナス駅は1859年に設置され、第二次世界大戦後の1953年に再築された。現在の駅舎は2008年に改修されたものである。

なお2015年9月に駅舎のホーム側壁面に杉原千敏の功績を顕彰するプレート⑩が掲げられた。なお、その右横にはリトアニア語、英語、ロシア語によって1941年6月14日および1945～52年にかけて、ソ連軍によって多くのリトアニア市民がシベリアに強制移住させられたことを銘記するプレート（写真⑪）があることに注意しなければならない。



⑩カウナス駅舎壁面のプレート



⑪ソ連軍によるシベリア追放を記すプレート

(52)

(2) 杉原千畝記念館



杉原記念館

Sugiharos namai / Sugihara House

⑫杉原記念館の絵はがき

杉原千畝記念館はカウナス市バイズガント通り (Vaizgantog)30番地にある。はじめに在カウナス大日本帝国領事館と杉原千畝に関する略年譜を示すと下記のようになる。

- 1939年 3月22日 ドイツのリトアニア領クライペダ (ドイツ名メーメル) 併合
5月11日 ノモンハン事件勃発 → 9月16日に停戦合意
7月20日 杉原千畝、在カウナス大日本帝国領事館副領事 (領事代理) に任命
8月23日 独ソ不可侵条約の締結 → 独ソのポーランド東西分割、ソ連のバルト三国・ベッサラビア・フィンランド併合を密約
8月25日 英・ポーランド相互援助条約 仏・ポーランド相互援助条約締結
8月28日 杉原千畝、カウナスに到着
9月1日 ドイツのポーランド侵攻 → 第二次世界大戦勃発
9月2日 英仏の対独宣戦布告
9月17日 ドイツ軍のワルシャワ占領 ソ連のポーランド東部侵攻開始
11月23日 在カウナス大日本帝国領事館の開設
- 1940年 5月15日 オランダ降伏
5月28日 ベルギー降伏
6月14日 フランス降伏

- 7月18日 ユダヤ難民が領事館前に集まる
- 7月29日 ユダヤ難民に日本通過ビザの大量発給を開始
- 8月2日 外務省より領事館退去命令着信
- 8月3日 ソ連のリトアニア併合 5日ラトビア併合 6日エストニア併合 → ともにソ連邦を構成する共和国となる
- 8月28日 領事館閉鎖 メトロポリスホテルに移動 9月4日まで宿泊
- 9月5日 カウナス駅から国際列車でベルリンに出発

リトアニアの臨時首都に「在カウナス大日本帝国領事館」を設置する目的は、ノモンハン事件（1939年5月11日～9月16日）停戦後のソ連情報収集および第二次大戦開戦後はドイツの動向（対英戦を完遂するか、対ソ戦に転ずるか）をめぐる情報収集（諜報活動）にあったことは明らかであろう。

領事館は民間から借り上げた3階建住宅で、杉原が外務省に送った報告と「領事館見取図」によると、その1階4室は領事館、2階は杉原一家の居室とされ、3階2部屋には一般のリトアニア人が居住したという。現在、執務室として公開されている部屋は旧応接室、土産物をおく部屋は旧控室、DVDを視聴する20平方メートル余の部屋が旧執務室で、ここで杉原はユダヤ人にビザを作成し、給付したのである。

⁽⁶⁾
この建物は杉原一家が退去したのちはながく集合アパートとして使用されたが、1999年12月に設立されたNPO法人「杉原（命の外交官）基金」によって杉原千畝およびオランダの名誉領事ヤン＝ツバルテンディク（Jan Zwartendijk, 1896～1976）の功績を讃える教育施設である杉原千畝記念館（杉原ハウス）として公開されることとなった。ちなみにツバルティンディクは、杉原がユダヤ人に日本通過ビザを発給する根拠とした「キュラソー・ビザ」（最終受入国をオランダ領キュラソー島というカリブ海の小島とする形式的なビザ）を発行した人物として知られる。なお記念館スタッフによると、現在の執務室に置く事務机や電話、⁽⁷⁾タイプライター等の備品はオリジナルではなく、記念館開設時に用意したもののことである。ただし壁面のガラスケースに保管された日章

(54)

旗はカウナス領事館で使用されたもので、ケースの左下にその旨が記されている。また2、3階はヴィタウタス＝マグヌス大学の日本研究センターが置かれているため非公開とのことであった。後掲ユダヤ人群衆写真⑭を撮影した2階旧寝室内部および写真⑮を撮影したと推定される旧居間内部も確認したいと考えたが、それは叶わぬことであった。



⑬記念館展示室

領事館が機能したのは1939年11月23日から翌40年8月28日までの9か月ほどで、それは第二次大戦の勃発から3か月が経過して独ソによるポーランドの分割占領が完了した時点からイギリスを除くヨーロッパ諸国がドイツとその同盟国の支配下に組み込まれた時点に相当する。この状況下で世界地図を一覧すれば、ユダヤ人が命を繋ぐためにはシベリア鉄道によって満州国または日本を通過して第三国に逃れる以外になかったことが理解されよう。

のちに杉原は、ユダヤ人が殺到した運命の日について以下のように記している。

忘れもしない1940年7月18日の早朝の事であった。6時少し前、表通りに面した領事公邸の寝室の窓際が、突然人だかりの喧しい怒声で騒々しくなり、意味の分からぬわめき声は人だかりの人数が増えるためか、次第に高く激しくなってゆく。で、私は急ぎカーテンの端の隙間から外をうかがうに、なんと、これは大部分がヨレヨレの服装をした老若男女で、いろいろの人相の人々が、ザッと100人も公邸の鉄柵に寄り掛かって、こちらに向かって何かを訴えている光景が眼に映った。(中略)、群衆は今のところ僅か200人ほどに過ぎないが近日中に恐らく何千人にもふくれ上がる筈であ

る。いずれもポーランド西部都市からのユダヤ系であって、ナチス・ドイツ軍による逮捕、虐殺の難を逃れ、唯一の遁れ道としてのヴィルナ（ヴィリニウス・小林補）を目指し、晴雨を問わず幾日もかかって、あるものは鉄道線路伝いに痛む足を引きずりつつ、あるものは運よく行きずりの荷馬車を借りつないで大移動を続け、かろうじてここカウナスに辿り着いた訳である。（「決断（外交官秘話）」）

つぎの写真は、その1940年7月18日早朝、日本領事館前に殺到したユダヤ人の状況を伝えるものである。⑭は杉原夫人幸子^{ゆきこ}が2階寝室のカーテンの蔭から撮影したもの。領事館の鉄柵に手を伸ばして何事かを訴えるユダヤ人に、手前側2名の領事館員が対応する場面である。手ぶれの映像に現場の緊張感が感じられる。⑮は杉原の義妹（幸子の妹菊池節子）が撮影したもので、管見のかぎりでは撮影場所の記述はないが、門柱の正面に位置する2階の居間の窓から撮影したのではないかと推測される。なお、中央のトレンチコートを着た男性は、杉原からビザを得てアメリカに渡ったことが知られている。⁽⁹⁾

⑭



⑮



このユダヤ人に対して、杉原は東京の外務省からの訓令に反して日本通過ビザを発給するのであるが、それについて以下のように回顧する。

果たして浅慮、無責任、我武者らの職業軍人グループの、対ナチス協調に迎合することによって、全世界に隠然たる勢力を擁するユダヤ民族から永遠の恨みを買ってまで、旅行書類の不備、公安配慮云々を楯に、ビザを拒否してもかまわないのか。それが果して国益に叶うことだというのか。

(56)

苦慮、煩悶の揚句、私はついに人道、博愛精神第一という結論を得た。

そして私は、何も恐ることなく職を賭して忠実にこれを実行し了えたと、
今も確信している。(「決断 (外交官秘話)」)

この決意のもとで発給されたビザは記録に残るものだけでも2139枚、それによって救われた命は6000名といわれている。しかし大戦後の1947年6月、杉原はその責任を取らされる形で外務省を追われるのである。その詳細は杉原関連資料に譲りたい。

(10)

(3) メトロポリスホテル



⑩メトロポリスホテルの正面入口と杉原千畝顕彰プレート

領事館を退去した杉原一家は8月28～9月4日までこのホテルに宿泊し、ここでもビザ発給を継続した。5日朝、杉原一家はホテルからカウナス駅に向かい、正午近くに出るベルリン行の国際列車に乗車するが、その発車間際までプラットフォームに並ぶ多くのユダヤ人に通過ビザに代わる「渡航証明書」を書き与えた。

(12)

なお、2015年9月にその功績を讃える杉原千畝記念プレートが掲げられた。

(4) 第9要塞博物館

第9要塞博物館の配付資料によると、この博物館は1958年に設置された。第9要塞はロシア帝国がカウナス周辺に設置した12要塞の一つで1912年に建設された。第一次大戦では対独戦の拠点となったが無傷で残り、独立後の1924年に

カウナス労働収容所に改められた。

ついで1940～41年のソ連軍占領期はNKVD（内務人民委員部）の管理下でソ連国内の収容所に政治犯を送致する前の収容監獄として用いられた。また1941～44年のドイツ軍占領期は強制収容所・処刑場となったため、ここでカウナス市のゲットーから移送された3万人以上のユダヤ人を含む多国籍の囚人5万人以上が処刑された。

現在の博物館は、旧第9要塞収容所の雑居房や独房などを用いた資料展示室と1984年に建設された占領期資料展示室からなる。前者は展示順に、第一次世界大戦時の第9要塞関係資料および1924～40年時のカウナス強制労働収容所関係資料を経てホロコーストに関する資料にいたる。ホロコースト関連資料は(1)1941～44年時のカウナス市ゲットーとユダヤ住民の虐殺情況、(2)第9要塞収容所から脱出した64名の情況、(3)杉原千畝とユダヤ人救済に関する資料などが展示されている



⑰虐殺されたユダヤ人
少年少女の写真パネル



⑱ステンドグラスとマリア像

後者の占領期博物館は1984年に建設され、ソ連、ナチスドイツ、ソ連とつづく併合期と占領期の資料と記録を展示して、その過酷な支配を糾弾するとともにリトアニア国民の抵抗運動をたたえ、非業の死をとげた人々を追悼する。とくに展示室の北面に作られた巨大なステンドグラスはリトアニア国民の不幸、喪失、苦痛、悲嘆を描写して、その前に立つマリア像とともに深い鎮魂の意が込

(58)

めらたものに相違ない。

(5) ヴィタウタス＝マグヌス大公像



⑱ マグヌス大公像

カウナス市のライスヴェス通りの中央にあるヴィエニーベス広場に建つヴィタウタス＝マグヌス大公（1350～位1401～1430）の銅像。ヴィタウタスはリトアニアの最盛期を現出した大公（リトアニア王位1429～1430）で、その足下には支配下に置いたドイツ騎士団、ポーランド、ロシア、タタール（キプチャク＝ハン国の後継国）の4兵士が頭を垂れ膝を折り曲げて降伏する姿をかたどり、とくにドイツ騎士団の兵士は折れた剣を膝下に抱く形に作られている。

この大公像は、1932年にカウナス市南郊のPanemuneの丘に建立され、1952年にソ連政府の命令によって破壊された像を継ぐもので、ソ連邦から独立を宣言した1990年、ヴィタウタス大公がドイツ騎士団に大勝したジャルギリスの戦役580周年を記念して再建された。AUKURAS（リトアニア様式の祭壇）を象る大公像はソ連の強権政治によって非業の死を遂げ、シベリア追放に処せられたリトアニア国民に配慮し、リトアニアの独立を強く意識したものであることは言うまでもない。なお2010年には、その600周年として戦場の土を詰めたカプセルが銅像内に安置されたことも特筆に値しよう。この英雄像には極めて高い政治的メッセージが込められていることに注意しなければならない。

おわりに

9月4日、小雨のなかを訪れた杉原千畝記念館はカウナス市街東辺に位置する小高い丘の上、閑静な住宅地のなかにあった。その門前に立った時、ようやくここに至ったとの思いが溢れた。

1時間あまり見学したのち、学生アルバイトと覚しき記念館スタッフにかつて杉原と家族が生活した2階の寝室と居間を見学したいと伝えた。それは(55)頁の写真⑭⑮を写した窓際に立ち、ユダヤ人が集まった門柱や鉄柵があったあたりを見たいと思ったからである。残念ながら研究室として使用中のため難しいとの返事であったが、いつの日か確認したいと考えている。

調査の終了後、館外に出てもなお去りがたく、雨にけぶる記念館のたたずまいを眺めていると、通りをはさむ向かいの敷地に立つ大きなブナの木が目にとまった。そこは杉原在館時は空き地だったところであるが、その鬱蒼とそびえる枝々の先にはまだ青いドングリの実が覗いていた。

1940年7月18日から40日あまり、領事館前に集うユダヤ人たちも、この木の若い枝振りを見たのではあるまいか。私は宅地の鉄柵越しに手を伸ばしてその太い幹回りを撫でようとしたが、なぜか思いとどまった。

今次のカウナス滞在は9月3日から2泊3日、ヴィリニユスにもどる5日はベルリンに向かう杉原の出立日と重なることとなった。偶然のことではあるが、そこに幾ばくかの縁を想わざるを得ない。

今次の研究出張の主目的は杉原千畝のビザ発給に関する現地調査であるが、副次的なものとして①ドイツ軍占領期におけるユダヤ系リトアニア人の強制収容と虐殺の状況とそれに対する現在の国民感情、②ソ連軍占領期と民政移管後における反ソ派人士に対する弾圧、投獄、シベリア追放の状況とそれに対する現在の国民感情について、その一端なりとも知りたいと考えていた。

幸いなことに、獲得した成果は予想を超えるもので、とくに1944年にドイツ軍を撃破してリトアニアに進駐したソ連軍に対する反ソ武装闘争は1953年まで継続して2万人を超える戦死者が出たこと、さらに現在のリトアニア社会はソ

(60)

連の併合とドイツ軍からの解放を軍事占領と定義し、ドイツ軍の侵攻および占領と同じく徹底してこれを糾弾し、そこに斃れた多くの同朋の鎮魂を極めて重く位置づけていることを確認したことは大きなことである。

当然ながら、私の世界史授業はユダヤ人の犠牲と杉原の功績のみを強調するものではなく、ソ連の支配下に組み込まれたリトアニアの窮状にも言及しているのであるが、従来の説明だけでは不足することを痛感したのである。これも現地調査の賜物であろう。その成果をどのように活かすか。今後の研究課題としなければならない。



⑳杉原千畝記念館の向かいに立つブナの木

注

- (1) 外務省ホームページ (www.mofa.go.jp/mofaj/) にカウナス、リーガ、タリン、クライペダ、カリーニングラードの表記を追加した。
- (2) 駐日本リトアニア大使館ホームページ (<https://jp.mfa.lt/jp/jp/>)。
- (3) 山岡規雄「リトアニア共和国憲法」(『外国の立法—立法情報・翻訳・解説—』No238掲載、国立国会図書館調査及び立法考査局編、2008年12月、<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/287276/www.>)
- (4) 同上
- (5) Rudienė, Virginija, and Vilma, Juozevičiūtė. The Museum of Genocide Victims: A Guide to the Exhibitions. Vilnius: Museum of Genocide Victims, 2006. Print.

- (6) 渡辺勝正『真相・杉原ビザ』(大正出版、2000年) 248頁の「カウナス日本領事館見取り図(1939年当時)。また249頁に引用する杉原の外務大臣宛書簡に「防諜に配慮して3階も借りる交渉」とあるが、そのまま3階にはリトアニアの民間人が居住していたようである。これについては寿福滋『杉原千畝と命のビザ—シベリアを越えて—』(サンライズ出版社、2007年) 24頁に居住者の証言と写真が掲載されている。
- (7) カリブ海のオランダ領キュラソー島は税関もなく入国できることに着目し、キュラソー行のビザの発給を決断した。ツバルティンディクはフィリップ電機会社のカウナス駐在員であるが、1940年6月14日ラトビアのリーガに駐バルト三国オランダ大使デッケルから在リトアニアオランダ名誉領事に任命された。杉原記念館のパネル説明には少なくとも2345通の「キュラソー・ビザ」を発行したとある。なおこの人物は、杉原と通過ビザ発行について協議した5人のユダヤ人代表の一人である。
- (8) 杉原幸子監修、渡辺勝正編著『決断・命のビザ』(大正出版、1996年) 137頁、295～296頁。
- (9) 写真④は、杉原・渡辺前掲書注(8) 149頁、写真⑤は渡辺前掲書注(6) 53頁より転載。
- (10) 「杉原千畝手記」による。原・渡辺前掲書注(8) 154～155頁。
- (11) 前掲注(6)(8) および杉原幸子『六千人の命のビザ(新版)』(大正出版、1994年)、杉原誠四郎『杉原千畝と日本の外務省—杉原千畝はなぜ外務省を追われたか』(大正出版、1999年)、渡辺勝正『杉原千畝の悲劇—クレムリン文書は語る』(大正出版、2006年)、白石仁章『諜報の天才—杉原千畝』(新潮社、2011年)、山田純大『命のビザを繋いだ男—小辻節三とユダヤ難民』(NHK出版、2013年) 白石仁章『杉原千畝—情報に賭けた外交官』(新潮社、2015年) など。
- (12) その時の緊迫した状況は「杉原千畝氏インタビューの内容」(敦賀ムゼウム発行) に記されている。

附記 小稿は2016年度特別研究期間助成費、早稲田大学特定課題研究助成費(2016K-341)の研究成果の一部である。

